

七条中学校だより7月5号

京都市立七条中学校

令和8年7月6日

発行：校長 林 秀雄

夏季大会に向けて2 最終回1点差2アウト満塁

いよいよ夏季大会・コンクールが目の前に迫ってきました。特に三年生にとっては、これまで歩んできた三年間の集大成となる大会です。先日の学校だよりでは、「勝っても負けても、おめでとうなんだ」という言葉を通して、結果だけでなく、そこに至るまでの努力の価値についてお話ししました。今回は、今年の夏季大会激励会で皆さんに紹介した出来事を、改めて伝えたいと思います。

以前、私が勤務していた学校の野球部が京都市大会（当時はコロナで春季大会が中止。それを生徒に伝える時が本当に辛かったです。）の決勝戦に挑んだときのことです。

試合は最後までどちらに勝利の神様が微笑むかわからない、一進一退の熱戦でした。そして迎えた最終回。こちらが1点リード。相手チームの攻撃でツーアウト満塁。あと一人抑えれば優勝。しかし、ヒットやミスが出れば同点、あるいは逆転される可能性もあるという手に汗握る場面でした。

選手たちはもちろん緊張していたでしょう。ベンチの仲間も、スタンドで応援する人たちも、固唾をのんで見守っていました。まさに野球で最も「しびれる」瞬間の一つです。

結果はセカンドゴロ。最後のアウトが記録され、試合終了。選手たちは歓喜し、応援する人たちも大きな拍手を送りました。

しかし、それ以上に私の心に強く残ったのは試合後の閉会式でのことでした。当時の専門部長の先生が選手たちにこう問いかけられたのです。

「最終回、1点差、2アウト満塁。野球で最もしびれる場面で、守っていた皆さんは『俺のところにボールが飛んで来い。（必ず守ってみせる。）』と思って守っていましたか。」

私はその言葉を聞いたとき、深く考えさせられました。最後の場面で「ボールが来ないでほしい」と願うのではなく、「自分のところに来い」と思える。その気持ちは一朝一夕で生まれるものではありません。毎日の練習を積み重ね、仲間と励まし合い、失敗や悔しさを乗り越え、自分を鍛え続けてきたからこそ生まれる覚悟です。

私はその時、「これまでの練習の積み重ねは、まさにあの瞬間のためにあるのだ」と感じました。どんな場面になろうとも、これまで積み重ねてきた練習を信じる。仲間を信じる。そして自分自身を信じる。（信じるということは、自分・仲間・積み重ねを肯定し、自信と力に変えることです。）その姿を表現できることこそが、本当の強さであり、本当の成長・成果なのだと思います。

ただし、「信じること」と「思い描いた結果になること」は同じではありません。どれだけ練習を重ねても、どれだけ仲間を信じ、自分を信じて、必ず勝てるとは限りません。試合の結果や勝敗は、最後まで自分で選ぶことはできないからです。

しかし、これまで積み重ねてきた練習は違います。苦しい日も、悔しい日も、仲間と励まし合いながら続けてきた日々は、自分自身が選び取ってきた時間です。今日まで努力を続けてきたこと、その一つ一つの選択こそが、皆さんの財産です。

七条中学校の皆さんにも、この夏、きっとそれぞれの「しびれる場面」が訪れることでしょう。

それは試合の勝敗を左右する一球や一本のシュートかもしれません。これまで何度も練習してきたプレーをする瞬間かもしれません。あるいは、苦しい状況の仲間へ声をかけたり、チームのために全力で応援したりする場面かもしれません。

その瞬間に、「自分がやる」「自分に任せてほしい」と胸を張って言える人であってほしいと思います。

もちろん、人は緊張します。不安にもなります。しかし、緊張するのは本気で取り組んできた証です。不安になるのは、その大会が自分にとって大切だからです。だからこそ、その気持ちから逃げるのではなく、これまでの積み重ねてきたことを思い切り表現する選択をしてほしい。

皆さんには、これまで積み重ねてきた時間があります。支えてくれた仲間がいます。励ましてくれた先生や家族がいます。そして何より、最後まであきらめずに続けてきた自分自身があります。そのすべてを力に変えて、大会に臨んでもらいたい。

私は、皆さんがどんな結果を手にするか以上に、最後の瞬間に胸を張って「自分はやり切った」「これまでの時間と経験は、充実したかけがえのないものだった」と思えることを心から願っています。

七条中学校の皆さん、一人ひとりのこれまでが実を結ぶ、最高の夏になることを願っています。自分を信じ、仲間を信じ、そして三年間の積み重ねを信じて、全力で挑んでください。皆さんの素敵なガッツポーズを見られることを心から祈っています。